
表現技法における絵画と写真の交差

——グスタフ・クリムトの肖像画にみるぼかしを中心に——

福間加代子（京都大学）

世紀末ウィーンの画家グスタフ・クリムト（1862-1918）は女性の肖像画を数多く描いたことで知られている。彼の多くの肖像画に関して、モデルの顔のみが写実的に描かれているという特徴がこれまで指摘されてきた。例えば、《セレナ・レーデラーの肖像》（1899）のような初期作品の場合、衣服を身にまとったモデルの身体は、その輪郭がぼかされることによって背景と地続きであるかのように見える。こうしたぼかしは、特に 1897 年から 1902 年にかけて顕著なものである。ぼかしの効果は顔を強調することにあつたと考えられるが、本発表では、そのさらなる可能性を探るために、以下に示す二つの切り口を提示し考察を行う。

一つ目は、写真の地位向上を図り、絵画に似せた写真を制作したピクトリアリズムである。ウィーンにおけるピクトリアリズムの動きは、1897 年に結成された写真家グループ「トリフォーリウム」を中心に展開されていた。彼らが好んで用いたゴム印画法は、印画紙に直接手を加えることで作品に絵画のような独自のぼかし効果を与えるものであった。トリフォーリウムの写真家たちはクリムト個人とも交流があり、また彼らの作品が分離派の『聖なる春』に掲載されたり、分離派展で展示されたりするなど、分離派との関係も深かったといえる。本発表ではトリフォーリウムの中でも特に、ハインリッヒ・キューン（1866-1944）の作品を中心に上げクリムト作品との比較を行う。

二つ目は、ジェームズ・マクニール・ホイッスラー（1834-1903）である。彼がクリムトの作品に影響を与えているということは、ぼかしが用いられたクリムトの作品《ひじ掛け椅子の女性》（1897/98）および上述した《セレナ・レーデラーの肖像》において、構図および色彩の観点から指摘されている。本発表では両者の繋がりを新たにぼかしの観点から考察する。ホイッスラーもまた、薄めた油絵の具の使用することにより得られる色調の効果を作品に利用していたが、このぼかし効果こそがまさに、ピクトリアリズムの写真家たちが画家の手本としてホイッスラーを選んだ理由であった。

先行研究に見受けられる二つの指摘、すなわちクリムトが 1898 年ごろからピクトリアリズムの写真のように絵画の背景を不鮮明に描き始めたということ、および彼がホイッスラーの作品から影響を受けていたということ、本発表では議論として深め、ぼかしを結節点とすることで一つに結ぶ。その上で、ピクトリアリズムの作品ならびにホイッスラー作品において、ぼかしがどのように使用されていたのか、またそうした表現にどのような狙いがあったのかを検証し、クリムト作品との比較検討を行う。これによりクリムトの初期肖像画においてぼかしが担っていた役割を明確にするとともに、世紀転換期のウィーンにおける絵画と写真の交差を示すことを目的とする。